二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦書）

【答案作成上の注意事項】

1　解答用紙の最初に記されている時代・分野のうち、自分の選択したものを〇で囲むこと。

2　「近代」以外の時代・分野の答案は、縦桝目（表裏）の共通解答用紙に記すこと。

3　「近代」は、解答用紙が別になっているので、それを使用すること。

＊各時代・分野の試験問題は、左掲のナンバーの問題用紙に記されている。

上代	2
中古散文	3
中古韻文・中世韻文	4
中世散文	5
近世	6
近代	7～10
日本語学	11～12
和漢比較文学	13

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース

※解答は別紙（縦・横　書）

上代

問　次に掲げた資料一・二について、問イ・ロに答えよ。

資料一

問イ　資料一は『万葉集』の一部であるが、書写者による多数の書き込みが施されている。資料二は、資料一で囲み（□）を付けた書き込み部分を拡大したものである。資料二を正確に翻字せよ。（翻字にあたっては、漢字・仮名いずれも通行の字体を用いること。）

問ロ　資料一の『万葉集』の歌群について、自由に論述せよ。

資料二

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中古散文

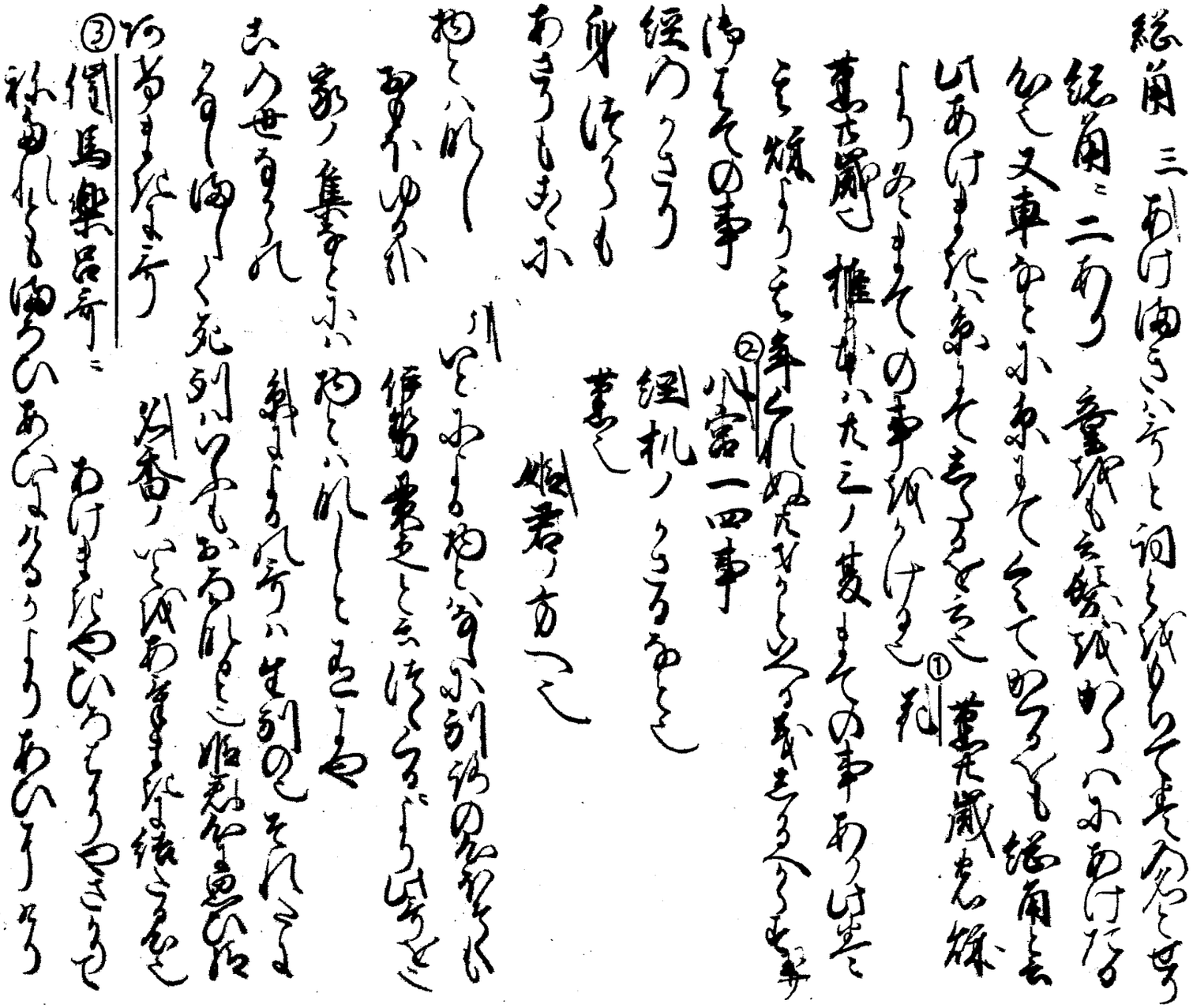
左は、『源氏物語』のある注釈書の一節である。次の問いに答えよ。

（1）左の全文を改行等そのままに翻字し、適宜必要な箇所に句読点、濁点を加えよ。なお、異体字については、通行の字体に翻字してよいものとする。

（2）傍線部①は、ある注釈書の略号である。この注釈書について説明せよ。

（3）傍線部②の人物について説明せよ。

（4）傍線部③の下に、③の詞章が引用されている。この詞章ではどのようなことがうたわれているか。具体的に説明せよ。



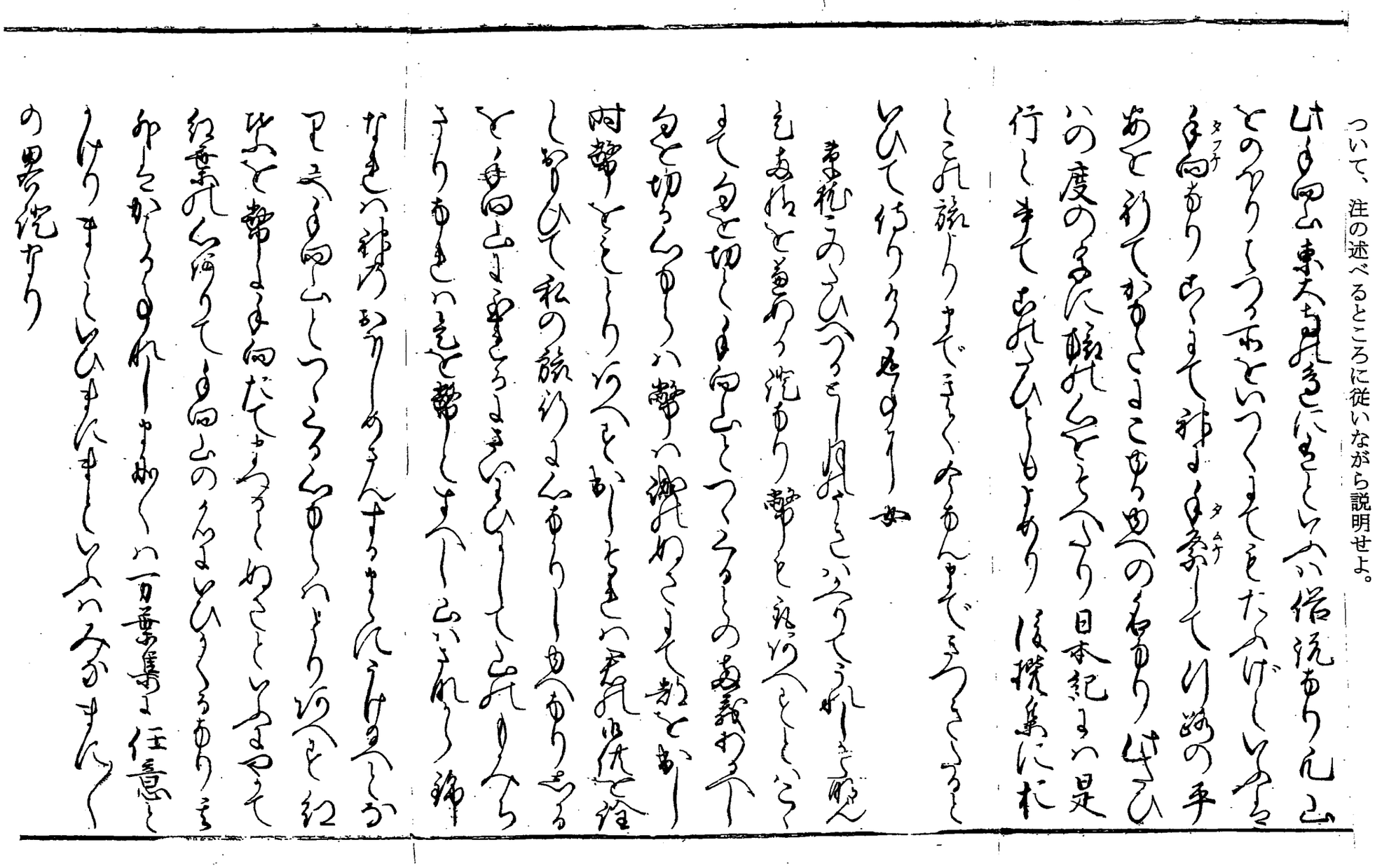
二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中古韻文・中世韻文

左は、契沖著『百人一首改観抄』、「菅家」歌注の一部である。
次の問いに答えよ。

（1）この資料をすべて改行等そのままに翻字せよ。
（2）引用されている後撰集歌を正確に現代語訳せよ。
（3）句切れについて「両義あるへし」とあるが、それぞれの「義」説について、注の述べるところに従いながら説明せよ。



二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

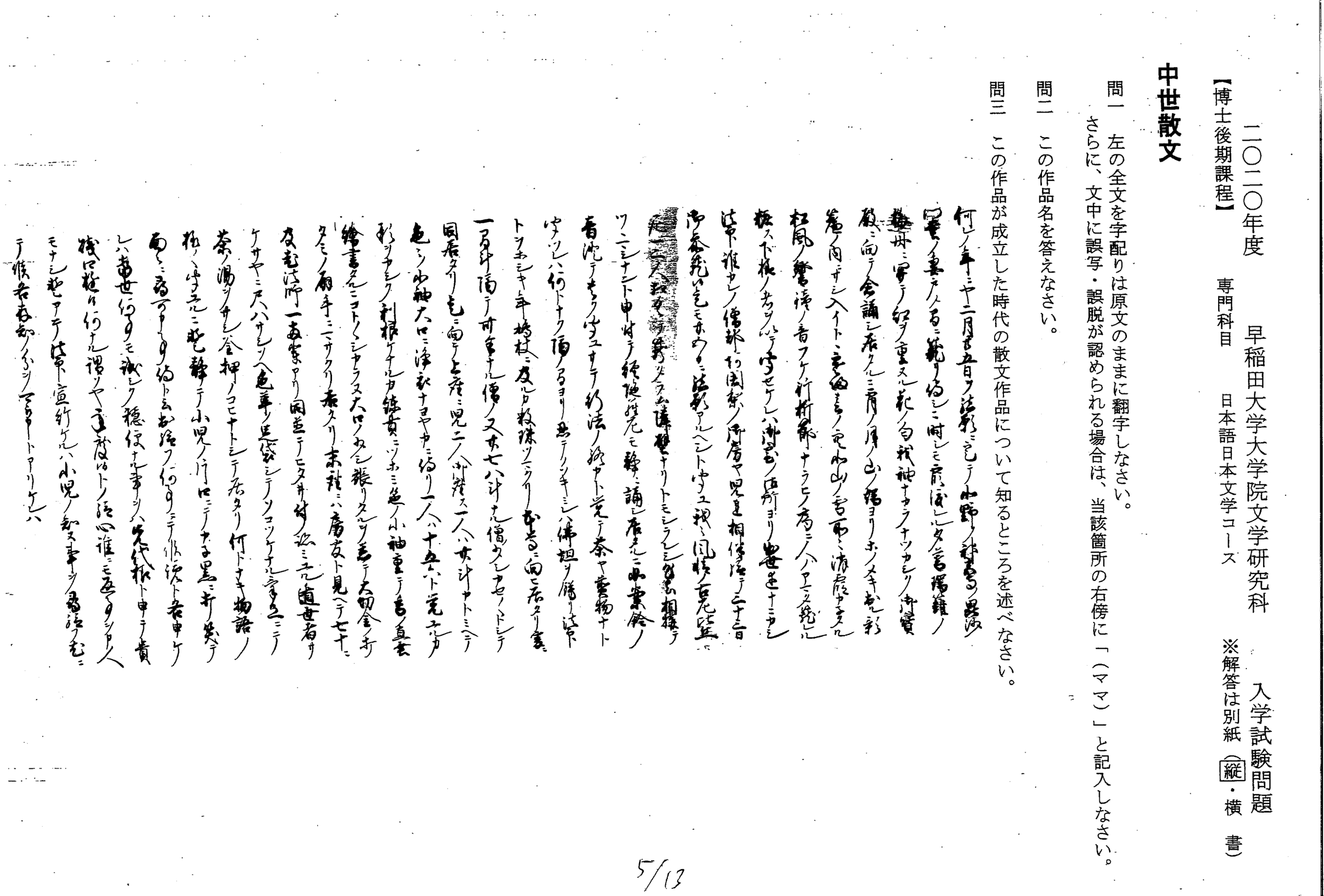
【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

中世散文

問一　左の全文を字配りは原文のままに翻字しなさい。
さらに、文中に誤写・誤脱が認められる場合は、当該箇所の右傍に「（ママ）」と記入しなさい。

問二　この作品名を答えなさい。

問三　この作品が成立した時代の散文作品について知るところを述べなさい。

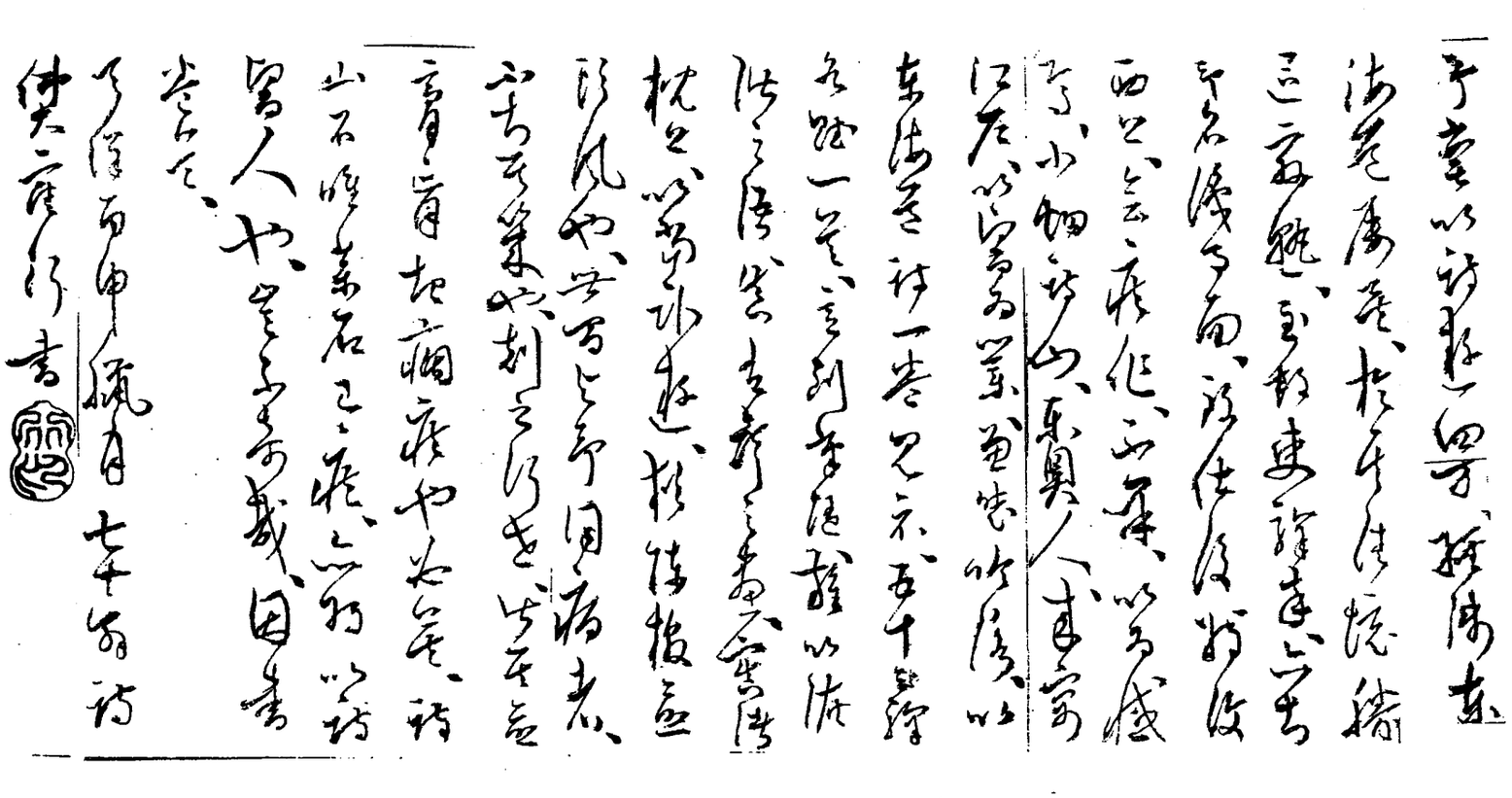


何レノ年ニヤ二月ノ比ノ夕ノ法華ニ見テ小野ノ社家ノ長流
□堂ノ裏ノ人目ニ荒リ給シニ時シモ霞ノ間レモ霞ノ間ニ夕ノ言葉籠ノ
難冊ニ写テ紀ノ重又ハ花ノ白桜袖ナラナツカシリ小賢
殿ニ向テ金論シ居タルニ青ノ月ノ山ノ端ヨリホノメキ出テ彩
雲ノ間ヲ出イト、高砂ノ雪ノ下ニ清殿ヤ文ハ
松風ノ響清ノ音フケ行桁ノ下ナラヒノ為ニ人ハアヒ絶ヒ
極スト根ノ方ハ雪セケレハ御堂ノ庭ヨリ世ヲ去ニシ
法華堂ノ僧侶行国衆ノ所詣ヤ児ヲ相伴ヒテ二十二日
御参詣ヒ給ヒ法華アルヘシトヤ又我ニ同様ノ点ヒ
[illegible]ナリトモシラレシ[illegible]相様テ
ワニシナント申ケテ純陽ヲ花モ静ニ論シ居タルニ小業餘ノ
看病テ[illegible]ケユヒテ約法ノ師ヤト覚テ茶ヤ薬物ナト
ヤウレハ行トナク間ノ召ヨリ出テ[illegible]ハ佛恒ノ儀リ法
トヲシキ年始杖ニ及ルカ数珠ツクリ[illegible]ル向ニ居タリ[illegible]
一月中間ニ所ヲ出タル僧又ハ七八計ナル僧又ハ[illegible]
同居タリ毛ニ向テ上座ニ児二人ハ[illegible]ス一人ハ廿計ナトミヘテ
色ノ小袖大口ニ浄衣ナヨヤカニ結リ一人ハ十五六ト見ユル
形ノ[illegible]ク利根ケナルカ錦貫ニツホミ色ノ小袖重テ色ノ直衣
絵書タルニコトクシヤラヌ大口ノ如シ張リタル[illegible]ノ扇ノ
タモノ扇手ニ[illegible]サクリ赤タリ[illegible]ハ唐女ト見ヘテ七十
及ル法師一人客ヤリ同座テ[illegible]ケ[illegible]ニ元道世者ヤ
ケサヤニ[illegible]ハ色華ノ[illegible]ニテソコツケナル[illegible]
茶ノ湯ノ[illegible]ノコヒナトシテ居タリ何トナキ物語ノ
様ハ[illegible]ニ乾静テ小児ノ行ヒニテナル黒ニ折笑テ
面ニ[illegible]ヤ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]
ハ[illegible]世ノ[illegible]ハ[illegible]代様ト申テ貴
様ハ様ノ行ナル習ヤ[illegible]ノ[illegible]人
モナシ乾アテ法華宣ノ行ケルハ小児ノ[illegible]ノ[illegible]
テ候[illegible]ノ[illegible]ハ

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

近世

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。



問一、右の漢文を適宜句読点を、現行のものに改めながら、全文翻刻せよ。

問二、右の文章をすべて、現代語訳せよ。

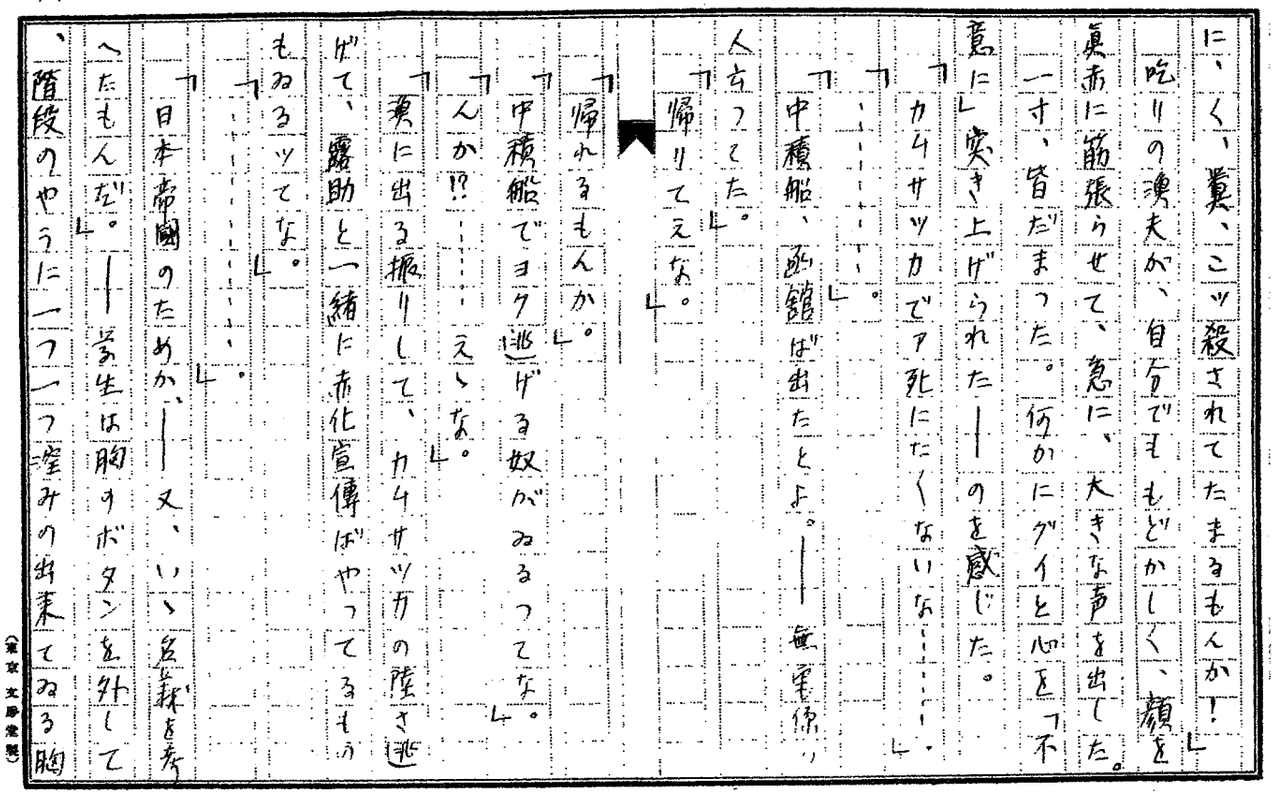
問三、右の文章をすべて、問二の「現代語訳」と呼応するように留意して、書き下し文にせよ。

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題
【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦書）

近代　次の1～3の問いに答えよ。

1　次の資料A・Bは、同じ作品の原稿と初出の本文の一部である。この作品の内容や文体、表記などについて具体的に読解し、そのうえで近代文学と検閲の問題について論述せよ。（20点）

A



に、く、糞、こッ殺されてたまるもんか！」
「吃りの漁夫が、自分でもどかしく、顔を真赤に筋張らせて、急に、大きな声を出した。一寸、皆だまつた。何かにグイと心を「不意に」突き上げられた――のを感じた。
「カムサツカでア死にたくないなー……。」
「……。」
「中積船、函館ば出たとよ。――無電係の人云つてた。」
「帰りてえな。」

B

「帰れるもんか。」
「中積船でヨク逃げる奴がゐるつてな。」
「んか!?……えゝな。」
「奥に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて、露助と一緒に市化宣傳ばやつてるものもゐるツてな。」
「……。」
「日本帝國のためか、――又、いゝ名義を考へたもんだな。――學生は胸のボタンを外して、階段のやうに一つ一つ窪みの出來てゐる胸を出して、あくびをしながら、ゴシ〳〵掻いた。垢が乾いて、薄い雲母のやうに剝けてきた。
「んよ、か會社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに。」
カキの貝殻のやうに、段々のついた、たるんだ眼蓋から、弱々しい濁つた視線をストオヴの上にボンヤリ投げてゐた中年を過ぎた漁夫が唾をはいた。ストーヴの上に落ちると、それがクルツ〳〵と眞圓にまるくなつて、ヂユウ〳〵云ひながら、豆のやうに跳ね上つて、見る間に小さくなり、油煙粒ほどの小さいカスを殘して、無くなつた。皆はそれにウカツな視線を投げてゐる。
「それ、本當かも知れないな。」
然し、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出して、ストーヴにかざしながら、「おい〳〵叛逆なんかしないでけれよ。」と云つた。
「……」
「歸れるもんか。」
「中積船でヨク逃げる奴がゐるつてな。」
「んか？……えゝな。」
「漁に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて、露助と一緒に××宣傳ばやつてるものもゐるツてな。」
「……」
「××帝國のためか、――又、いゝ名義を考へたもんだ。――學生は胸のボタンを外して、階段のやうに一つ一つ窪みの出來てゐる胸を出して、あくびをしながら、ゴシ〳〵掻いた。垢が乾いて、薄い雲母のやうに剝けてきた。
「んよ、か會社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに。」
カキの貝殻のやうに、段々のついた、たるんだ眼蓋から、弱々しい濁つた視線をストオヴの上にボンヤリ投げてゐた中年を過ぎた漁夫が唾をはいた。ストーヴの上に落ちると、それがクルツ〳〵と眞圓にまるくなつて、ヂユウ〳〵云ひながら、豆のやうに跳ね上つて、見る間に小さくなり、油煙粒ほどの小さいカスを殘して、無くなつた。皆はそれにウカツな視線を投げてゐる。
「それ、本當かも知れないな。」
然し、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出して、ストーヴにかざしながら、「おい〳〵叛逆なんかしないでけれよ。」と云つた。
「……」
「勝手だべよ。糞。」吃りが唇を蛸のやうに突き出した。
ゴムの焼けかゝつてゐるイヤな臭ひがした。
「おい、裁縫、ゴム！」
「ん、あ、こけた！」
波が出て來たらしく、サイドが微かになつてきた。船も子守唄程に揺れてゐる。腐つた海藻のやうな瓦燭燈ヒストーヴを圍んでゐるお互の、後に落ちてゐる影が色々にもつれて、組合つた。――靜かな夜だつた。ストーヴの口からの赤い火が、膝から下にチラ〳〵と反映してゐた。不幸だつた自分の一生が、ひよいと――まるツきりひよいと、しかも一瞬間だけ見返される――不思議に靜かな夜だつた。
「煙草無えか？」
「無え……」
「無えか？……」
「なかつたな。」
「糞。」
「おい、ウイスキーをこつちにも廻はせよ、な。」
相手は角瓶を逆かさに振つてみせた。
「おッと、勿體ねえことするなよ。」
「ハ、ハ、ハ、ハ。」
「飛んでもねえ所さ、然し來たもんだな、俺も……。」その漁夫は芝浦の工場にゐたことがあつた。そこの話がそれから出た。それは北海道の勞働者達には「工場」だと

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

2　次に掲げる六つの資料について、作品の場合は「作者」「作品」名、雑誌の場合は主要執筆者名を答えた上で、作品についてはその内容や執筆の背景、発表媒体との関りなど、雑誌の場合は文学史上の意義などを、各七行以内で述べよ。（各10点）

①

金色夜叉

「吁宮さん怎して二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言ふのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さん善く覚えてお置き。來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死でも僕は忘れんよ！可いか、宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ」。

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂しう咽入りぬ。

「那樣悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、うれは腹も立たうけれど、どうか堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。私はお肚の中には言ひたい事が澤山あるのだけれど、餘り言難い事ばかりたから、口へは出さないけれど、唯一言いひたいのは、私は貴方の事は忘れはしないわ――私は生涯忘れはしないわ」。

「聞きたくない！忘れんくらゐなら何故見棄てた」。

「だから、私は決して見棄てはしないわ」。

「何、見棄てない？見棄てないものが嫁に歸くかい、馬鹿な！二人の夫が有てるかい」。

第八章

②

（第一）　夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも暗薄いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハフハした感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たが所謂人間といふものゝ見始であらう。此の時妙なものだと思つた感じが今でも殘つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる〳〵して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之顔の眞中が餘りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも咽せぽくて實に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が惡くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ委を隱して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ〳〵這ひ出し

③

白樺　第一號目次

「それから」に就て……（一）……武者小路實篤
獨逸の繪畫に於けるNeudeutschen……（一七）……K　K　生
羅馬にて（新體詩）……（三三）……雨　東　生
紐（短歌）……（三六）……木下利玄
重い歌（新體詩）……（三七）……武者小路實篤
エレクトラ（ホフマンシュタール）梗概……（三八）……茅野二十一
挿畫に就て……（三三）……記者
カットに就て……（三三）……記者
消息……（三三）……記者
發刊に際して……（三三）……記者數人

親族會議（チエホフ）……（一）……里見弴
西方古傳（シュンキウッチ）……（二）……有島武郎
網走まで（小說）……（六）……志賀直哉
萬屋（小說）……（二七）……正親町公和

挿畫

AN DIE SCHÖNHEIT……クリンゲル
森の沈默……ベックリン
罪……シュック
カット六種……フイデュス
表紙畫……K　K　生

8/13

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

④

國境の長いトンネルを抜けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止つた。

向側の座席から娘が立つて來て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷氣が流れこんだ。娘は窓いつぱいに乘り出して、遠くへ叫ぶやうに、

「驛長さあん、驛長さあん。」

明りをさげてゆつくり雪を踏んで來た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れてゐた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鐵道の官舍らしいバラックが山裾に寒々と散らばつてゐるだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれてゐた。

「驛長さん、私です、御機嫌よろしうございます。」

「ああ、葉子さんぢやないか。お歸りかい。また寒くなつたよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいてをりますのですつてね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて參るだらうよ。若いのに可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、驛長さんからよく教へてやつていただいて、よろしくお願ひいたしますわ。」

「よろしい。元氣で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だつたよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出しがいそがしかつたよ。」

「驛長さんすねぶん厚着に見をますわ。弟の手紙には、まだチロッキも着てゐないやうなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでるよ。それでごろごろあすことに不つ倒れてるのさ。風邪をひいてね。」

驛長は官舍の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでせうか。」

「いや。」

「驛長さんもうお歸りですの？」

「私は慎戒をして、醫者に通つてるんだ。」

「まあ。いけませんわ。」

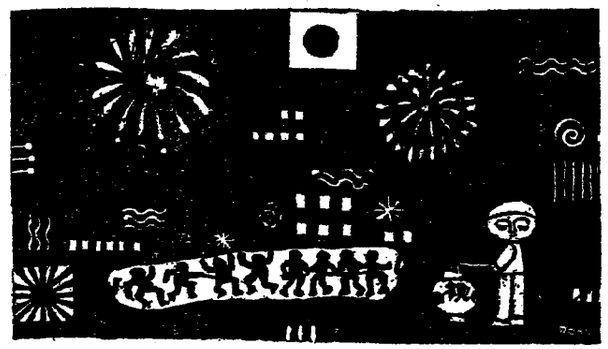
和服に外套の驛長はさつさと寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、

「それぢやまあお大事にいらつしやい。」

「驛長さん、弟は今出てをりませんの？」と、葉子は雪の上を目視しして、

「驛長さん、弟をよく見てやつて、お願ひです。」

悲しいほど美しい聲であつた。高い襟巻きのまま夜の雪から木魂して來さうだつた。



⑥

風流夢譚

深沢七郎

カット　谷内六郎

あの晩の夢判断をするには、私の持っている腕時計と私との妙な因果関係を分析しなければならないだろう。私の腕時計は腕に巻いていると時刻は正確にうごくが、腕からはずすと止ってしまうのだ。私は毎晩寝る時は腕からはずして枕許に置くので、針は止って、朝起きて腕につけると針はうごきだすのだ。だから、

「この腕時計は、俺が寝ると俺と一緒に寝てしまうよ」

と私は言って、なんとなく愛着を感じていたのだった。これは腕時計が故障しているので時計の役目をしないことになるのだが、それでも私は不便は感じなかった。私と同居しているミツヒトという男は機械類が好きで、時計も高級なリエストミンスターの大型置時計を置いてあるからだった。

数ヶ月前のことだった。

「そんな役に立たない腕時計は、修繕した方がいいじゃァないか」

と弟にすすめられて、弟の知りあいの時計屋さんに持って行ったことがあった。

「分解掃除をするんですねえ」

そう言って時計屋さんは中を開いて、

「アッ、こいつは変い時計ですよ」

と、眼を見はった。

「そんなにいい時計だったですか？」

と覗き込んだ弟も、「アッ！」と叫んだ。時計の中は歯車もゼンマイも部分品は燦然と輝く金製品だった。

「金ですか？」

と弟が念を押した。

「純金ですよ、こんな時計は見たことがないから」

と言われて、私は（そうでしょう〜〜）と思っていた。手を合わせておがまれるように頼まれて買わされた時計だったが、（あゝ、郷りだしものだったなあ）と嬉しくなった。時計屋さんは5分間ばかり調べてくれたが、

「どこも故障などしてないですねえ」

と言って、それから、

「こんないい時計に、こんなバンドでは時計が泣きますよ、このくらいのをつけなければ」

と千五百円の金張りのバンドをつけてくれた。

（そうでしょう〜〜）

と私は千五百円支払って、帰りがけに、

「あの、夜中に止ってしまうのですが」

ときくと、

「それはネジを巻かなかったでしょう」

と言われた。ネジを巻いても止ってしまうのだが、相手がそう言うのでこれ以上しつこく言うことが出来なくなってしまった。それで、そのまま帰って来てしまったが、少したって、デパートの時計部へ持って行って見て貰ったら、

「これは、タイヘンな、インチキ時計ですねえ、スイス製のマークだが、こんな時計は、なかの部分品は、これは、トタンのメッキみたいなものですね、バンドだけは金張りでこんな時計につけては勿体ないですよ」

と言うので（そうでしょう、やっぱり）と思いながら聞いていた。この時計は友人から3千円で買ったのだった。その友人は帰国するアメリカ婦人から捨値で5千円で買ったのだそうである。その友人は「母キトク」の電報がきた時に、

「買ってくれ、捨値でも5千円するのだが、3千円でいいから」

とすすめてくれて私が買ったのだが、アメリカ婦人の捨値ということも本当だかどうか疑わしいし、「すごい、いい時計だ」とほめてくれた時計屋さんもバンドを売りつけるためのお世辞だったらしい。そんな不愉快なことがあったりしたが、なんとなく私は愛着があって、「俺が眠ると、俺と一緒に眠ってしまう」と言って、私は手離す気になれなかったのだった。

あの晩、私が家に帰ったのは夜おそく私の腕時計は1時30分だった。腕から時計をはずして寝たのだが、私の意識していた時刻はウエストミンスターの針は1時50分をさしていて、その時は私の腕時計も

9/13

⑤

近代文學

1

戦原惟人を圍んで……近代文學同人……（一八）
藝術歴史人間……本多秋五……（二）
昔の日記……正宗白鳥……（三）
よもの眺め……宮本百合子……（四）
詩　二篇……長光太……（三六）
變形譚……花田清輝……（三一）
島崎藤村（一）……平野謙……（三八）
創作
わが血を追ふ人々……坂口安吾……（六〇）
停れる時の合間に……佐々木基一……（六七）
死靈（一）……埴谷雄高……（七四）
同人雑記……（五八）

1946年　第1巻　第1號

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

3　次の文章は、『平成史講義』（ちくま新書　二〇一九年）に収められた吉見俊哉の「昭和の終焉」の一節です。あなたの研究対象、研究テーマと関係づけて、考えを述べなさい。

一方で、人々が今日、「平成」の尺度で時代を捉えようとする根底には、「ご破算」の思考がある。一般に、社会がその年を数える仕方には二通りあるとされる。第一は、西暦のようにある出来事が起きた年からの経過年を示す直線的方法だ。第二は、干支のように一定の年数で循環する方法である。元号は、新しい君主の即位や象徴的な儀式により過去の歴史がご破算になり、新しい歴史が始まると考える点で循環方式に近い。ここでの要点は、過去を「ご破算にする」発想で、「明治」と「大正」、「昭和」と「平成」、いずれの切断にもかつて「御一新」という言葉で「江戸」を葬った仕方に通じるものがある。歴史の客観的な条件はどうであれ、人々は「平成」をひとまとまりの時代として括ることで連続的な歴史に「ご破算」の契機を持ち込み、過去を彼方に葬り去ろうとしているのだ。

しかしそもそも、私たちの生きる現代は、「ご破算」式には歴史が成り立っていない。未来は過去との連続と切断の交錯のなかにある。「平成」は、その語感とは逆に失敗と危機が連続する時代だったが、その失敗も危機も、由来はすべて昭和以前に遡れるものだ。「平成」はそれ自体としてよりも、むしろ「昭和」からの屈折として理解可能であり、その意味では「昭和」と「平成」は連続的である。二〇世紀後半から二一世紀にかけての大きな世界史のうねりのなかで、「昭和」も「平成」も同じ時代の異なる局面をなすにすぎず、天皇の代替わりによってその流れが切断できると考えられそうな根拠はどこにもない。

こうしたことの一方で、「平成」の始まる一九八九年前後からの約三〇年間を、日本現代史の決定的な転換局面として捉えることも不可能ではない。グローバル化こそ、この時代を貫いた最も重要なモメントだった。ポスト冷戦の楽観ムードを新自由主義とグローバル資本主義がのみ込み、国民国家に生じていった無数の亀裂のなかで貧困とテロリズム、新たな差別主義が抬頭した。ネット社会が、この時代を貫いたもう一つの決定的なモメントだったことにも異論はないだろう。リアルとヴァーチャルが溶融し、後者の影響力が急伸するなかで既存の多くの制度が機能不全に陥っていった。さらに人口構造の急速な変化、少子高齢化のなかで社会は継続的な危機を迎えていった。つまり「平成」とは、グローバル化とネット社会化、少子高齢化のなかで戦後日本社会が作り上げてきたものが崩れ落ちていく時代であり、それを打開しようとする多くの試みが挫折していった時代であったと、とりあえずは要約できる。平成史とは、多幸症的なバブル景気に始まりながらも、崩壊、挫折、失敗、縮小、危機によって特徴づけられていく苦難の三〇年間であったのだ。

だから私たちは、平成史を歴史の「ご破算」とは異なる仕方で総括する必要がある。「平成はこんな時代だった」という物言いで、過去をご破算にすべきではない。「平成」の三〇年は、一言でいえば「失敗の歴史」であり、そのどうしようもなく失敗を重ねていった私たち自身の「失敗史」を、今や時代が新たな転機を迎えようとしている現時点から総括することからこそ、未来への継続的な転換の指針を導き出していくべきなのである。

10/13

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦[redacted]書）

日本語学を専攻する者は、次の一または二のいずれかを選択して解答せよ。

一　左掲のものは楫取魚彦『古言梯』（明和元年成）「附言」の一節である。これを読んで日本語学史における意義を解説せよ。

○或人吾友藤原宇万伎ニ問、假字つくりてよりもの、いにしへ上つ代よりあるべきよしにて、文字渡りて後音韻四聲などゝ、又ハ悉曇などゝいふことを、こゝろ得ざるなり、いづれにも文字のうくのさゞめきなべ、音國のさまにて云ざかりくべし、宇万伎登、吾縣主のいへらく、かゝる天竺よりも本字てつものハあらじ、たゞ言のみあれ、後ハ日月鳥獸千万の物の形を書て、その音のまゝにせしなり、その形より音ハ知りがたきハいにしへ、後の世のあらハにぞ、かくて皇朝の言の事といさゝかいまゞいねなむの假字を用ひざるハ、他の國の音韻四聲も悉曇などよりなるなれば、文字ハ後ものなれども言の意より出つもの、その言をいまゝにハ音韻即口の内にあるなれば、いかにもかにもこゝろ計王弘計王に申すハ、御兄背王と和りて、君も同じ心にあれ、億計王弘計王に申すハ、御兄いづを御兄いづを御弟にもとつべきなれば、上つ代よりいひ出る言の上を下へいひかけるこゝろ、冠辭ハ多の事にて、いねなむの言一つづゝ

をり、是らハ文字をつくぬさゝの事、吾國の言の多くるを又よ、かみ風の伊勢といひ、ばるがすみ井上のくにひ、みあぞくふをみのをにんにいひ、そらかぞふ、れわつの子がおぼいひ、ひ後ハ理をまろけく、字を書てるにも言ふ、いねをれなむにまゞ用ひるものあるべ、たにひ、ひ出せ、國風を多く万葉集に載しふ、ねえ系をれの言のけぞ兄ぞるにハ知べ、吉の東人ハ文字の音韻を知ざるの事ハおろかにみゆ、とまりて女ハ今ぞふ考ふべ古と思ひハるべ、かくの如く上つ代の言ハおのづから正しうけることにあ、あやしきさまでるかん、其正しきを言のまゝを傳へ、假字おさべ必古き書きまゝてたゞ人べきものし、假字のくづるハ即言のくづるし、古書ハ古事記ふ、ぞ、延喜承平のころ至るまでの書ぞもしそ、後の書ハやうにとあまるなるべ、此言ちるとも、後の世ハたまゝ假字の事ハ人あるも、皇朝の古書をバよみも得ずして、あるハ文字の反四聲ふ、あるハ悉曇もまにぞきてそへみる古てくぞ、ひ、私のこゝぞ論ふ、たゞ古き書にそ、たゞふ、ふて、五十連の音をもくこにふ、もふたゞてふ、ふ、ひ、此事心得ずてふける人てろみる私をやえく、古書を見バ、終ふゞたゝべ、問ふ、悉曇ハいにぞ後ハ此國ふてふ、ものおさべ、ふ、

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

二　次は、『口語法別記』（大正六年）の一部である。これは、国語調査委員会の編纂であるが、その起草立案者は、大槻文彦である。次の問いに答えよ。

一　大槻文彦の日本語研究への貢献について知るところを述べよ。

二　傍線1「誰かいるだろう」とあるが、これと「誰がいるだろう」とは意味は違っている。どう違うのか、なぜなのかを述べよ。

三　傍線2の部分において、異質なものが例として挙げられている。何がどう異質なのか、を述べよ。

四　「か」は推量を表すと言えるか、言えないか、その根拠とともに論述せよ。

【三五〇】「か」疑をあらわすもの推量の意、不定の意にも云ふ。

1 誰か居るだろう。幾年か歴た。どこかにあろう。何かの話、誰かに問こう。紙か筆をくれよう。

降るか晴れるか定まらぬ。行こうか歸ろうか。出來ようかも知れぬ。

讀みか書きかする。

遠いか近いか見えない。長いか短いか知らぬ。

打たれるか突かれるか分らぬ。打たれか突かれかする。

讀ませるか書かせるかしてみよう。讀ませか書かせかする。

2 取つたか取らぬか知らぬ。これだかそれだか覺えて居ない。なんだか不思議だ。

誰のかあろう。どこからか來よう。どこでか逢つた。よいとかわるいとかきめよう。どちらえか向け。そればかりかと思う。これくらいかと考える。いつまでか分らぬ。

二〇二〇年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

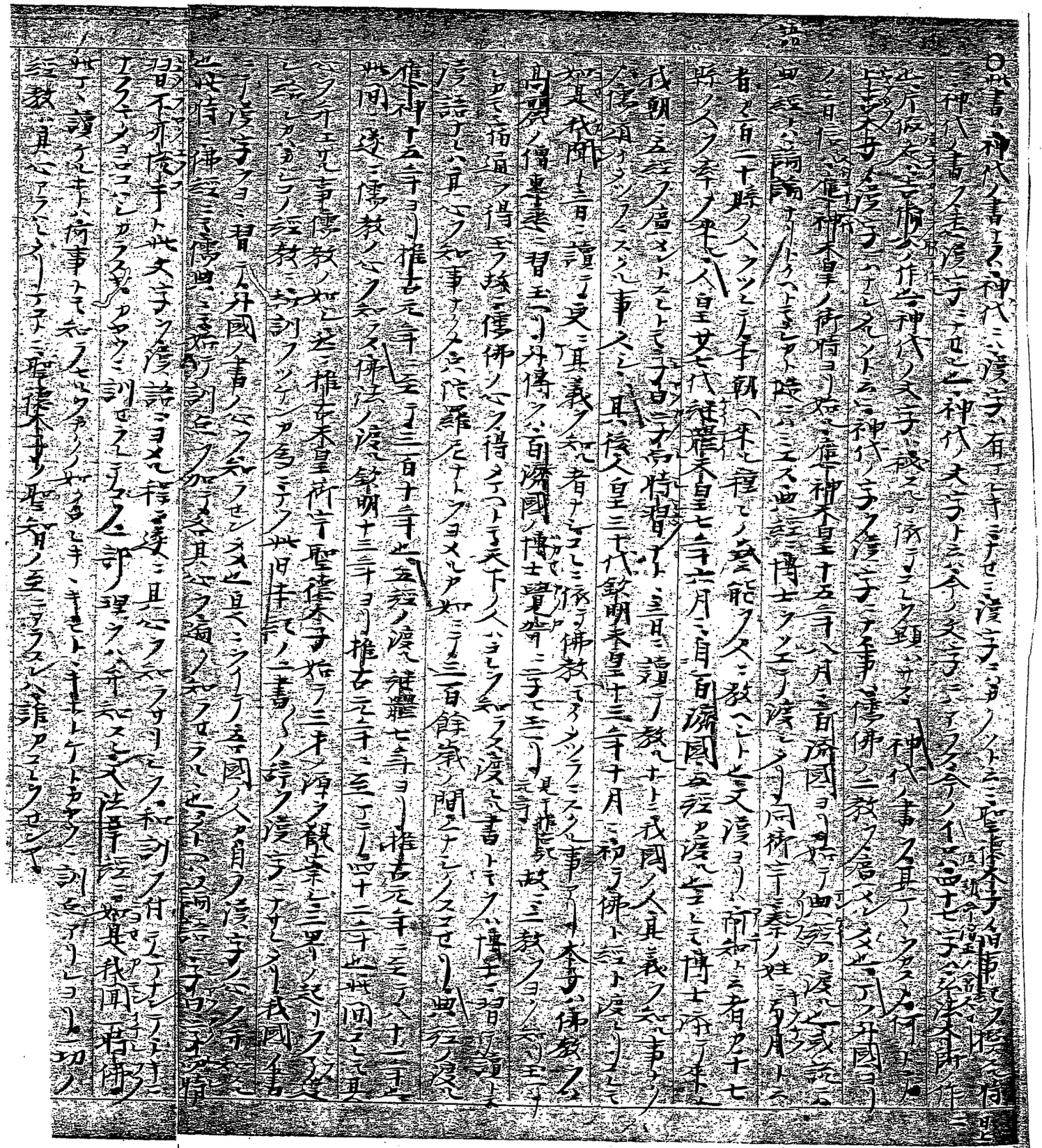
【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

和漢比較文学

左の文を読み、次の問いに答えよ。

（1）この資料の全文を、資料に施されている訓点を含めて翻刻せよ（漢字は通行の字体を用いること）。

（2）左の文の内容の概略を簡潔に記すとともに、この資料の日本文学史上における意義について、考えるところを述べよ。



13/13

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

——ここから記入すること——

〔日本語日本文学〕

＊選択分野に○を記入すること。

- 上代
- 中古散文
- 中古・中世韻文
- 中世散文
- 近世
- 近代
- 日本語学
- 和漢比較文学

総　点

（裏へ続く）

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

（次頁へ続く）

ここから記入すること

裏へ続く

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

採点欄

日本語日本文学(近代)解答用紙(その二)

2 ① 作者（　　）　作品（　　）

2 ② 作者（　　）　作品（　　）

2 ③ 主要執筆者名（　　）

採点欄

日本語日本文学(近代)解答用紙(その三)

2 ④ 作者（　　）　作品（　　）

2 ⑤ 主要執筆者名（　　）

2 ⑥ 作者（　　）　作品（　　）

採点欄

採点欄